

氏 名	みぞ ぐち つね とし 溝 口 常 俊
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 423 号
学位授与の日付	平 成 13 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	日本近世の畑作地域史論

論文調査委員 (主 査) 教 授 石 原 潤 教 授 金 田 章 裕 教 授 石 川 義 孝

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、我が国近世において畑作村落がいかに展開してきたを歴史地理学的に実証することにある。論者は、いわゆる水田中心史観に批判的な立場から、従来の地理学、歴史学、民俗学の研究史を展望し、問題点を整理した結果、本論文の論点を主に以下の4点に絞ることにした。

(1) 網野善彦が百姓イコール農民ではないとし、百姓の中の非農業民を抽出し問題とするのに対し、本研究では普通の百姓が如何なる生業を行っていたかを明らかにし、そのような生業の一環としての畑作や非農業的生業に注目する。(2) 水田の乏しい畑作村落を取りあげて、村落の変遷、村民の生活を克明に描くよう努める。その際、既往の研究が重視してきた畑地利用、経営、儀礼などの分析に止まらず、畑作百姓の生活の実態や畑作以外の生業にも注目して考察する。(3) 畑作村落の構成員の全貌を押えるべく、歴史人口学の方法をも参照し、家族、人口分析に重点を置く。そして、(4) 畑作村落の内側だけを見るのではなく水田村落との交流にも配慮し、近世村落全体の中での畑作ないし畑作村の位置づけを目指す。

論者は、分析の基礎単位を村落に設定するが、その上位(地域)・下位(家族)スケールとの関連性をも重視する。そしてそれら重層的なスケールからなる地域が、近世を通じ、あるいは近代・現代に至るまで、如何に変化していくかを追究する。対象とする地域は、御勅使川扇状地畑作村を核とするが、他地域での畑作村との比較の上において畑作村落の一般性、特異性を描き出すことを目指し、白川郷、屋久島、隠岐などの畑作村落をも取りあげる。

本論文の第1部は、メソスケール(いくつかの村落が集まった地域)の地域研究の事例として、甲州御勅使川扇状地扇央部という9つの藩政村からなる水田皆無の畑作地域をとりあげ、そこでの個人、家族、村落、地域の実像を実証的に追求し、乏水地域に何故大集落が立地しているのか、水田中心社会である我が国においてなぜ水田皆無の畑作村が存在しうるのかを究明し、あわせて、村落間交流についても検討する。

第1章では、御勅使川扇状地の自然環境と集落の歴史的経緯を概観し、扇状地面、特に扇央部が乏水位地域であること、それにもかかわらず、近世以来、かなり大規模な村落が、純粹畑作村として展開してきたことを明らかにした。

第2章では、扇状地扇央上の大集落西野村の世帯構成の分析を行なった。近世百姓家族に関する研究は、従来多くの業績があげられてきたものの、従属百姓の変容過程についての吟味が必ずしも充分になされてきたとはいえなかった。そこで、西野村の寛文～享保年間の多数の宗門改帳を資料とし、百姓個人の動きを追跡することにより、百姓家族の変容について検討することを試みた。その結果、従属百姓の抱屋が抱主の本百姓の後を相続する場合、門屋が抱屋に上昇し新規本百姓として独立する場合、下人が門屋になりさらに新期本百姓として独立していく場合など、身分を転換させながら独立して行く過程が追跡され、家族構成も複合家族から核家族へと一変したことが、また、それらの背景には荒地の開墾と商業活動とが認められることなどが明らかにされた。

第3章では、畑作村落の存立基盤をさぐる目的で、まず上層百姓がいかなる動向を示してきたのかを検討した。西野村の在地地主をとりあげ、譜代下人・抱屋などの隷属百姓、奉公人などを抱えた世帯構成、地主経営と土地集積過程、煙草問屋を中心とした商業活動などを考察した。その結果、彼らの商業活動が、純畑作村落の維持・発展に大きな影響を及ぼしたこ

とが明らかにされた。

これに対して第4章では、主として下層百姓の農間余業として活発に展開されてきた行商活動の実態と変遷とを、近世から現在に至るまで長期間にわたって追跡した。近世における行商活動は、甲州武田家から与えられたと称せられる「野売り免許状」を特権的に活用して行なわれ、初期には柿や野菜等の自家農産物を近隣水田村の粃と交換する形態をとっていた。それが後期には煙草や実綿および当地で加工された綿製品が重要な商品となり、信州、駿州、武州等の近国へ販売された。明治時代以降、販売品は大都市の間屋からの仕入品である洋服、呉服が主流となり、販路は全国一円へと拡大され、終戦直後にその最盛期を迎えた。このように、扱う商品や販路に違いはあれ、いずれの時代においても、行商活動が当地域の畑作農村存立の重要な基盤であり続けていたことが明らかにされた。

第5章では、時代は明治中期になるが、畑作村落西野村の中層百姓の生活と行動を、一農民の日記によってつぶさに検討した。その結果、この農民は、表向きは養蚕農家であるが、小地主であり、商人であり、はたまた大工の世話役であったりして1人何役も兼ねており、その日常行動も冠婚葬祭に時間をとったり、神社詣でや甲府への買物と、多岐にわたっていたことが明らかになった。

以上の第1部、第2～5章をとおして、西野という水田皆無の畑作村で、村内の土地所有の面での上層、中層、下層いずれにおいても、その生業は農業に限らず多様であり、行動も多種広範囲に及んでいたことが実証された。

第6章の通婚圏と第7章の奉公人移動圏に関する研究は、御勅使川扇状地を含む甲州各地の村落の、百姓個々人の地域間交流が、空間的に如何に展開しており、時間的に如何に推移していったのかを明らかにしたものである。まず第7章では、宗門改帳をもとに、封鎖性が強いとされる近世村落がどの程度他村と交流があったのかを、通婚圏を指標として検討した。その結果によると、村内婚率はそれほど高くないものの、通婚は8キロ圏内ではほぼ完結していた。都市や街道沿いの村では遠方婚の比率が高いが、土地所有階層別にみた場合、通説に反して、上層で遠方婚が多いと言う事実は認められなかった。また、畑作村は畑作村同士で通婚する傾向が強かった。

第7章では、近世村落の交流関係を、年季奉公人を指標として検討した。まず宗門改帳から家族構成を復元し、検地帳と照合させ奉公人の輩出層と雇用層についてその生産基盤を明らかにし、ついで奉公人の性別、年令、奉公年数、移動距離、移動方向を検討した。自村内での奉公人吸収率はあまり高くなく、村外奉公としては畑作村から水田村への移動、都市（甲府、江戸）への移動が顕著に認められ、年を経るごとに遠距離移動の傾向が示された。

次に、第2部の「畑作村落の地域的展開」では、より広い視野から、中部日本及び西日本各地の畑作村落の実態を明らかにし、近世村落における焼畑の意義と、畑作と水田作の併存の意義について考察する。

第8章では、甲州における焼畑村落の展開をとらえるべく、早川上流域の全村の土地所有状況を「刈立畑検地帳」をもとに分析した。その結果、焼畑耕作と土地所有階層との関連については、従来定説になってきた「焼畑耕作は隷属農民がおこない、上層農は水田もしくは普通畑に力をいれる」といった図式は否定され、上層百姓こそが積極的に焼畑耕作をしていたことが明らかになった。また、これら焼畑村落における農間余業の実態を検討し、その存立基盤を解明した結果、林業においては、村役人層の山林伐採請負業、一般百姓の杣稼ぎ・日雇い稼ぎ、曲物稼ぎが行われ、さらに山金（間歩）稼ぎや川金（押掘）稼ぎなどの金山労働も広く展開していたことが明らかにされた。

第9章では、岐阜県の白川郷において、焼畑村落の展開過程を近世初期から現在に至るまでの長期にわたって、藩政村を単位として考察した。具体的には、焼畑の分布の変遷を小字ごとに追跡し、最盛期の明治後期については1筆ごとに明らかにし、また、個人別の土地所有構成の変遷についても検討した。その結果、近世初期から明治後期に至って焼畑面積は増大しており、従来の「時代を遡ればそれだけ焼畑も多かった」という通説は否定された。

第10章では、享保11年における屋久島の検地名寄帳を分析することによって、当時の世帯構成の復元と土地利用状況を明らかにし、さらに、明治時代の名寄帳の分析により、広範な焼畑の存在を確認した。そして焼畑の存在する里山地帯には、炭焼が行われており、民有林運搬の木馬道があり、そこが猿と人間が棲み分ける重要な緩衝地帯になっていたことをも指摘した。

第11章の隠岐と、第12章の尾張に関する研究は、第10章までがすべて畑作率100%に近い畑作村落を対象にしてきたのに対し、水田をも多数併せ持つ村落の中での畑作の意義を問うものである。即ち、畑作の意義は畑作村落に限られたものでは

なく、水田村においても見逃すことのできない重要な役割を演じていたことを論ずる。第11章の隠岐では、近世の50余村すべてが田と畑（牧畑など）を持ち、新田開発においても両者を開発し、個々の村落が田と畑を基調とする農業と、漁業、さらには林業を合せ持つ三位一体の村落生活を志向していたことが明らかにされた。

第12章では、我が国の代表的な大水田地帯である尾張平野においても、各村落は決して水田一色ではなく、必ず畑を併せ持っていたこと、特に明治17年の地籍図によれば、扇状地、デルタを問わず、多数の村落において、1筆の水田の中に浮ぶ島畑が広範に存在していたこと、名古屋を中心に畑作率や野菜生産の圏構造が存在したことなどが明らかにされた。

最後に論者は、歴史地理学者などが時間と空間を語る際の、視点と概念的枠組みについての試論を提示し、終章としている。

論文審査の結果の要旨

我が国の歴史学、民俗学、並びに歴史地理学にあつては、久しく、水田稲作の生産力の発展を基本に我が国の歴史の展開がとらえられるきらいがあつた。これに対して論者は、いわゆる「水田中心史観」批判に共鳴しつつ、畑作、特に焼畑耕作の重要性を主張すべく、本論文を執筆した。論者は、畑作・焼畑の研究が、近世について特に遅れているとの認識のもとに、対象時期を主として近世に限定し、また、畑作それ自体に止まらず、畑作農民、畑作村落の全体像を追求することを目的とし、併せて畑作と稲作、畑作村と水田村の関係をも視野に入れて、本論文を構成している。

本論文は、序章と終章の他、2部12章がらなり、600頁近くの大作である。第1部では、甲州御勅使川扇状地の畑作村群を採り上げ、インテンシブな史料分析に基づき、その存立基盤を明らかにすると共に、広く甲州全体の、畑作村—水田村間をも含む村落間の交流について論ずる。

甲州盆地西部に位置する御勅使川扇状地の扇央部には、近世を通じて水田が皆無にもかかわらず、一群の大規模な藩政村が展開してきた。論者は、なぜこのような村落の存立が可能であつたかという疑問から出発し、論証を進める。対象地域を概観した第1章に続き、第2章では、宗門改帳の詳細な分析に基づき、近世前期における従属百姓の広範な存在と、中期におけるその独立、並びに直系核家族形態の一般化を実証する。第3章では、検地帳の精密な分析により、上記の従属百姓層の独立の背景に、扇状地面の広大な荒地の、畑地への開墾があつたことを明らかにするとともに、近世後期には、商業活動への参加を通じて、再び農民層の分解が生じたことを明らかにする。第4章では、村明細帳、名寄帳等の多面的な分析を通じて、対象地域の特に下層農民が、甲州武田氏から授けられたと称する免許状に基づき、柿・木綿・煙草などの行商を広範に行つて、生計を立てて来たことを実証する。第5章では、時代はやや下るが、明治中期の1農民の日記の分析により、対象地域の中層農民が、養蚕、棉作に加えて商業等をも兼ね行い、極めて多彩な農家経営を行つていたことを論証する。これらの諸章により、御勅使川扇状地面に展開して来た、水田皆無の大規模畑作村の存立基盤と展開過程とが、余すことなく論述されたと言えよう。

続く第6、7章では、視野を広く甲州全体に広げて、多数の宗門改帳の比較検討により、前者では通婚圏を、後者では年季奉公人の移動圏を考察する。その結果、通婚に関しては、村落内婚率は通説より低い、通婚関係はほぼ8km圏内で完結すること、上層農の通婚圏が中下層のそれより広いという通説は成り立たないこと、畑作村群は相互に密な通婚関係を維持していることなど、注目すべき知見が得られた。年季奉公人の移動圏についても、村落内移動率は高くはないが移動は8km圏でほぼ完結し、通婚圏と類似のパターンをとること、畑作村→水田村の移動はあるが、その逆はほとんどないことなど、興味深い知見が得られた。

第2部では、視野をさらに広げて、中部地方及び西日本各地の畑作地域に関して、大量の史料の分析とフィールドワークとに基づき、その実態を明らかにするとともに、特に近世村落における焼畑の意義や、畑作と稲作の併存の意義について論ずる。

第8章では、甲州西南部早川流域の焼畑村落の実態を、焼畑の記載が詳しい当地域独特の検地帳の分析によって明らかにし、焼畑耕作が通説に反して上層農においても活発に行われたこと、雑穀や和紙原料の焼畑での栽培の他に、活発な農間余業が村落の存立を支えていたことを実証する。第9章では、飛騨白川郷の焼畑耕作の実態を、山絵図や検地帳の精密な分析により明らかにし、通説に反して焼畑が近世を通じて拡大を続け人口の伸びを支えていたこと、共同作業を伴う村抱え地で

の焼畑を通じて、明治期に至るまで顕著な階層分解が見られなかったことを実証する。第10章では、屋久島の検地名寄帳の分析を通じて、近世から明治期に至る人口増加や、複合家族から直系家族への変化を、焼畑の拡大と漁業の繁栄とが支えていたことを論証する。第11章では、隠岐の古地誌「増補隠州記」の分析により、近世隠岐の村落が、牧畑など畑作を中心にしながらも、水田稲作、漁業、林業にも依存していたとして、それらの補完的役割を強調する。最後の第12章では、尾張の古地誌「寛文村々覚書」及び「尾張徇行記」記載のデータを地理情報システムを用いて分析し、水田が卓越する尾張平野においても、島畑の形などで畑が広範に存在していたことを明らかにするとともに、畑作率や野菜産地の分布など当平野の空間構造が、名古屋や小田井市場を中心とする圏構造をなしていたことを論証する。

以上、本論文の特長は、論者が、近世及び明治前期の検地帳、宗門改帳、土地台帳、地籍図、日記、古地誌等の大量のデータを、コンピュータを用いてデータベース化し、統計処理を施すと共に、地理情報システム（GIS）を用いて地図化するなど、歴史的資料の分析に関して先進的な方法を導入し、成功している点にある。なお、宗門改帳の多面的な分析法は、速水融氏等歴史人口学者との交流を通じて、論者が深めて行ったものであり、また、古地誌データを用いての空間構造の分析法は、アメリカの中国研究者 G. W. Skinner 教授との交流を通じて、論者が習得したものである。

本論文は、このような方法を通じて、従来論じられることが相対的に少なかった我が国近世の畑作及び畑作村に関して、上述のような多くの新たな知見をもたらし、併せて従来の定説を覆すような、いくつかの知見を加えることに成功した。とりわけ、水田皆無の畑作村の存立基盤を多角的に捉えたこと、及び近世を通じて焼畑耕作がなお拡大する傾向にあったことを明らかにしたことは、本論文の大きな貢献であろう。

とは言え、本論文にも、改良すべき点がいくつか指摘される。すなわち、大量の史料のデータベース化が行われているが、第5、10、11章に関しては、それを用いての分析が、なお初歩的な段階を大きく出てはいない。また、畑作（村）と水田稲作（村）との、併存ないし補完的関係の重要性が主張されているにもかかわらず、その内実に関する実証はなお不十分である。さらに、使用しているいくつかの用語に曖昧が見られ、いくつかの史実認識に不確実さが残っている。しかしながら、これらの問題点は、論者の今後の更なる研鑽によって克服されると予想しうるものであり、本論文の貢献の大きさを損なうものとは言えない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2001年7月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。